

機関番号：12102

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2010

課題番号：19520092

研究課題名（和文）「高野切本古今集」全20巻の復元研究—古筆復元の方法論の確立—

研究課題名（英文）Restorative Study of 20 Volumes of Kōyagire Kokin-syu: Establishment of the Methodology for Restoring Old Writing

研究代表者

森岡 隆 (MORIOKA TAKASHI)

筑波大学・芸術系・教授

研究者番号：70239630

研究成果の概要（和文）：源兼行ら 11 世紀半ばの 3 人の能書が分担揮毫した『古今和歌集』現存最古の写本である「高野切本古今集」について、巻五・巻八・巻二十の完本 3 巻を除く 17 巻を復元した。このうち巻一・巻二・巻三・巻九・巻十八・巻十九の 6 巻は零本・断簡が伝存するものの、他の 11 巻は伝存皆無だが、各々の書風で長巻に仕上げて展示公開するとともに、それらを図版収載した研究成果報告書を刊行した。なお巻五についても、後に切除された重複歌 2 首の各々の当初の位置を特定し、復元し得た。

研究成果の概要（英文）：Seventeen volumes of *Kōyagire Kokin-syu*, excluding the three completed volumes, Vol. 5, Vol. 8 and Vol. 20, have been restored. The *Kōyagire Kokin-syu* is the oldest existing manuscript of the *Kokinwakasyu*, written by Minamoto no Kaneyuki and two other skillful masters of calligraphy in the mid-11th century. Of the restored volumes, while fragmentary remains or pieces of writing have been found for the six volumes, Vol. 1, Vol. 2, Vol. 3, Vol. 9, Vol. 18 and Vol. 19, no original manuscripts of the other eleven volumes have been found. These volumes have been made into extensive scrolls written in their respective styles of calligraphy, and released for display as well as published as a research finding report containing them as illustrations. On another note, we were also able to restore Volume 5 upon identifying the original location of the two sets of duplicate poems, which were later eliminated.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2007年度	200,000	60,000	260,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	200,000	60,000	260,000
2010年度	1,300,000	390,000	1,690,000
総 計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・美学 美術史

キーワード：高野切・古今和歌集・古筆・復元・仮名

1. 研究開始当初の背景

安土桃山時代以降、前近代的な古筆鑑定が行われてきたが、明治 44 年（1911）創刊の月刊誌『書苑』あたりに始まる科学的な考究

を受け、大正末年から学問的に究明する古筆学が進展し、断簡の網羅把握と研究が進められてきている。が、古筆を成立当初の姿に復元するという試みは、桑田笹舟（1900－89）とその門人が一部の古筆で行ったくらいで、

ほとんどなされてこなかったと言ってよい。
本研究の対象である「高野切本古今集」では、尾上柴舟（1876－1957）の著書『平安朝時代の草仮名の研究』や『歌と草仮名』で、巻によって書風が異なるにもかかわらず、すべて紀貫之筆と伝称されてきたことを訂正。甲（第一種）・乙（第二種）・丙（第三種）の3人の寄合書きであることを明らかにし、各々の同筆遺品にも言及した。

これを受けた源豊宗（1895－2001）が昭和6年（1931）に「鳳凰堂扉絵色紙形の題字の筆者に就いて」（『佛教美術』第18冊）を発表し、第二種筆者に源兼行（－1023－74－）を提示。これは同28年（1953）、伊東卓治（1901－83）が東京国立博物館蔵の九条家本延喜式（重要文化財）の紙背に、源兼行の自筆書状を発見したことにより実証され（『博物館ニュース』77号）、11世紀半ばに成立した「高野切」が『古今和歌集』の最古の写本であることも明らかになった。

また「高野切本古今集」の復元は、かつて完本であったときの転写本を模刻した江戸後期の版本『貫之卿筆古今和詞集第十八』（袋綴装、19丁）に基づいた巻十八の復元例があるのみであった（桑田笹舟著『笹舟かな教室基礎下』1975年・内山松魁堂・156～165頁所載）。

近年、徳川美術館と五島美術館に所蔵される国宝「源氏物語絵巻」について、蛍光X線分析装置を用いて顔料を特定し、蛍光画像で文様等を明らかにするなど、科学調査を実施したうえで、日本画家による復元がなされたが（2007年3月公開）、その報に接する前から、本課題の研究代表者のもとで古筆復元、とりわけ「高野切本古今集」の復元を進行してきたところである。

2. 研究の目的

古筆の中で主要な位置を占めるのが『古今和歌集』を揮毫したものだが、その最古にして、最高の書美を示す「高野切本古今集」を復元することの意義は大きい。

「高野切本古今集」は、天文13年（1544）当時、全20巻が近衛家に伝来しており、その巻二十の巻末に後奈良天皇（1496－1557）が漢文識語を添えている。『後奈良天皇宸記』の同年三月十五日条の記述と、識語の後に記された花押から導かれたものである（久曾神昇氏）。が、ほどなく、豊臣秀吉（1536－98）から高野山の木食応其（興山上人・1536－1608）に巻九が贈られるなど（1巻すべてであったか、湯木美術館蔵の巻頭17行の断簡であったかは未詳）、分割が進み、今日では、完本3巻（巻五・巻八・巻二十）と、後述6巻の零本・断簡を遺すのみであり、その他の11巻は、まったく伝存しない。

なお、伝存状況とその書風分類は、
〈第一種〉巻一・巻九・巻二十
〈第二種〉巻二・巻三・巻五・巻八
〈第三種〉巻十八・巻十九

であり、当初は第一種が巻一・巻九～巻十二・巻二十の6巻、第二種が巻二～巻八の7巻、第三種が巻十三～巻十九の7巻であったと見るのが定説である。

そこで、次項「3. 研究の方法」記載の方法によって復元巻を制作し、それらを一堂に展示するとともに、その報告書の刊行を企図した。

天文13年（1544）以後ほどなく分割され、大半を欠失した「高野切古今集」を四百数十年ぶりに全巻そろえ、11世紀半ば、平安王朝文化の中で昇華された仮名の書美を再現するものであり、古筆学・仮名書道界はもちろん、国文学・書誌学・日本美術史等にも、いささかの貢献ができるものと信じたことである。

3. 研究の方法

「高野切本古今集」の復元は、巻五・巻八・巻二十の完本3巻を除く17巻を補うことだが、巻五も重複揮毫されていた270・298番歌の2首が切除された形で伝わるため、これら2首を元の位置に戻す必要がある。

このうち巻一・巻二・巻三・巻九・巻十八・巻十九の6巻は多少の零本・断簡が伝存するが、原本と同様の縦約26cm×横約53cmの雲母撒きの料紙を用いて、散逸箇所を做書で補いつつ、紙の継ぎ目を原本どおりに守る必要がある。なお巻十八については、かつて完本であったときの転写本を模刻した版本（前掲）も参考資料となる。ただ、字母は現存断簡との対照で信じてよいものの、字形は第三種のそれと大きく異なっており、墨継ぎ箇所の工夫も含め、修整を要する。しかし、その他11巻は、まったく伝存しない。

したがって、これらの復元にあたっては、第一種・第二種・第三種の各々の仮名の字母とその頻度、連綿手法、詞書・作者名・歌・左注を規則正しく配した紙面構成などの特徴を踏まえつつ、また各々の同筆遺品も参考にしながら、臨書で培った技法を駆使して、欠失部分を做書で補わなければならない。その他、下記の点に留意する必要がある。

(1) 底本の選定

『古今和歌集』の流布本は、藤原定家（1162－1241）の写本系統であり、奏覧本系統かとされる11世紀半ばの「高野切本古今集」とは語句に異同のあることもある。本復元では、巻二十の部類名を「雅」とし、壬生忠岑に後世転訛の前の「にぶのただみね」と振り仮名を付すなど、高野切での表記に重きを置く久

曾神昇氏著『校注古典叢書 古今和歌集』
(1986年、明治書院)を、主たる底本とした。

(2) 歌中に漢字を交えない原則

歌中の漢字は、第一種では巻一の8番歌所用の「日」と32・49番歌の「花」、43番歌の「見」の4字。第二種では巻三—167の「花」、第三種では巻十九—1046の「人」と1062番歌初字の「世中」のみである。しかも、これら漢字のうち「花」は3字とも行尾の小スペースへの対応であり、歌は仮名だけで書くほうが無難。

詞書・作者・左注では漢字も交用されているが、特に「寛平」「承和」「貞観」「元慶」などの年号や「続日本(紀)」「僧正」などといった拗音の語は漢字で記されている。作者名では「遍照」の表記に留意。

(3) 内題・奥題の表記と書体

古筆では、内題を行書で丁寧、尾題を行草体で簡略に記するのが通例である。「高野切本古今集」で両題が遺るのは次のとおりだが、内題は7巻中6巻で「倭歌」か「倭調」と記している。復元では、こうした表記と書体に留意したい。

【内題】

古今倭歌集巻第一・古今倭歌集巻第九・古今和歌集巻第二十(第一種)

古今倭歌集巻第二・古今倭調集巻第三・古今倭調集巻第五・古今倭歌集巻第八(第二種)

【尾題】

巻第二十(第一種)

巻第五・巻第八(第二種)

巻第十八(第三種)

(4) 表紙と外題(題簾)

巻二十の見返しに本文と同筆で「古今和歌集巻第二十」と行書で打付書きした題記が見えるが、これは原装の表紙を見返しに転用したものと知られる。また第二種の源兼行が揮毫した巻五にも、第一種筆者の手になる「古今和歌集巻第五」の題簾が貼られている。江戸前期、原装の表紙をつけ替える際に、外題部分を切り取り、題簾として用いたとされるが、これにより20巻すべての外題を、首座の第一種筆者が揮毫したと見てよい。卷子に雲母砂子を撒いた白紙の表紙をつけ、そこに外題を書くのが真の復元だが、耐用性のこともあり、次善法で巻五と同様、緑系の表紙に題簾を貼ることとした。なお内題と異なり「和歌」と記すべきである

4. 研究成果

完本である巻五・巻八・巻二十の3巻を除く17巻を復元した。具体的には下記のとおりである。

(1) 断簡・零本伝存巻

○巻一・春歌上 1~68の68首中、40首半(含模写4首)判明 → 27首半復元

○巻二・春歌下 69~134の66首中、復元時35首半判明 → 30首半復元

*復元後、模写を含む4首が判明。

(次項「5. 主な発表論文等」[雑誌論文]の②参照)

○巻三・夏歌 135~168の34首中、13首(含模写1首)判明 → 21首復元

○巻九・羈旅歌 406~421の16首中、復元時7首伝存 → 9首復元

*復元後、巻末歌の模写判明。

○巻十八・雑歌下 933~1000の68首中、40首(含模写4首)判明 → 28首復元

*前掲『貫之卿筆古今和歌集第十八』に準拠

○巻十九・雑体 1001~1068の68首中、40首判明 → 28首復元

(2) 伝存皆無・全首復元巻

巻四・秋歌上 169~248の80首

巻六・冬歌 314~342の29首

巻七・賀歌 343~364の22首

巻十・物名 422~468の47首

巻十一・恋歌一 469~551の83首

巻十二・恋歌二 552~615の63首

巻十三・恋歌三 616~676の61首

巻十四・恋歌四 677~746の70首

巻十五・恋歌五 747~828の82首

巻十六・哀傷歌 829~862の34首

巻十七・雑歌上 863~932の70首

全首復元は至難であったが、断簡・零本伝存巻の復元も容易ではなかった。例えば第九の場合、7首を臨書し、9首を倣書で補ったが、そのうち410・411両歌の詞書は長文。また巻十九は判明率約6割で、残り28首、4割の復元であったが、1003番歌を除く巻頭1001~1006の5首は長歌で、1巻の総行数では、この数値が逆転。つまり、6割近くの4mを復元しなければならなかった。しかも1007・1013・1020・1062番歌など、零本や断簡に示された紙の継ぎ目を守りつつ、料紙14枚、全長7.5mの長巻に仕上げたものであり、復元歌数の多寡だけで計れない要素も多かった。

また、完本ではあるものの、誤って重複揮毫された2首(270・298、ともに現存)を江戸前期に切除した卷子で伝存する巻五(第二種)についても、その2首を各々当初の位置(第4紙末、第8・第9紙にまたがる両紙)に再配置し得た。研究代表者が位置を特定し、橋本貴朗氏が検証したものである。

以上、まずは11世紀半ばの揮毫から千年、

豊臣秀吉から高野山の木食応其（興山上人）に巻九が贈与されてからでも、四百数十年ぶりに全巻の様子がほぼ再現されたと言ってよく、平成 23 年（2011）2 月 8 日（火）から 13 日（日）まで、筑波大学総合交流会館・多目的ホールにおいて、「高野切本古今和歌集」復元全巻完成記念展を開催した。

それらは、巻七の 2.1m から巻十七や巻十九の約 7.5m まで、一巻平均約 5m。完本の複製も含め全長 100m に及んだが、巻頭から巻末まですべて広げ、日本書道史・古筆学・書誌学・文学をも踏まえた成果を公開した。

同展については、2 月 7 日の朝日新聞朝刊文化面のほか、7 日・8 日の NHK 水戸放送局ニュース、8 日の朝日・毎日・産経・東京・茨城・常陽、11 日の読売など、各紙朝刊茨城版や、筑波大学新聞 2 月 7 日刊 291 号、4 月 25 日刊 292 号で報じられた。専門誌紙でも、2 月 1 日刊行の書道美術新聞 954 号のほか、『芸術新潮』2011 年 4 月号で「みんなですなる仮名の正典《高野切》復元」の記事が掲載された。

書に関する記事が全国紙の文化面や総合芸術誌に掲載されること自体、稀有なことであり、その成果を高く評価していただいたことに深謝している。

なお、上記すべての内容を記し、復元巻の図版を収載した研究成果報告書（「5. 主な発表論文等」〔図書〕の①で後記）については、当初から 2 月の復元全巻展示後、1 か月半で仕上げるというタイトな日程ではあったが、3 月 11 日以降の東日本大震災の影響まことに大きく、5 月末の刊行となったことをお詫びしたい。

ともあれ、平安王朝の書美はもちろんのこと、『古今和歌集』20 巻といえども、巻ごとの歌数や長さが随分異なることも、復元巻によって実感することができた。古筆の原色図版がなかったころ、田中親美（1875－1975）の手になる複製によって恩恵を蒙ったように、このような古筆の復元が原本再構築に寄与することもある。

また、本研究の成果が契機となり、各古筆の画像データをもとに、パソコン画面上で古筆の復元が試みられるようになることも予想される。漢字遺品でも同様の手法が可能になると思われるが、やはり実際に料紙の上に毛筆で復元揮毫したものを卷子や冊子本に仕立てたものの価値は、何物にも換え難いものであろう。それもこれも、まずは本研究の成果を公にすることから始まるものと、その意義と責務を感じたことである。

ただ、上記のとおり、復元後に原本や模写の存在が明らかになったものもある。例えば巻二の 95・96・巻末 134 番歌断簡や 131 番歌の模写、巻九巻末歌の模写と見てよい断簡

が出現した。今後は、これらについても修正する所存である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

- ① 森岡隆、「高野切古今集」巻二ー 1 3 1 番歌模写断簡出現の意義、書之美、査読無、75 号、2008 年、見返しー 1 頁

〔学会発表〕（計 2 件）

- ① 森岡隆、仮名表現の歴史と教材化のヒント、平成 21 年度福島県高等学校経験者研修Ⅱ・教科指導研修・書道、2009 年 5 月 7 日、福島県教育センター（福島県）
- ② 森岡隆、書学書道史の教育の現状と将来、第 18 回書学書道史学会大会シンポジウム、2007 年 11 月 17 日、筑波大学（茨城県）

〔図書〕（計 6 件）

- ① 森岡隆、平成 19～22 年度科学研究費補助金 基盤研究（C）課題番号 19520092 「高野切本古今集」全 20 巻の復元研究—古筆復元の方法論の確立—研究成果報告書、高野切本古今和歌集の復元、2011 年、全 42 頁
- ② 森岡隆、芸術新聞社、決定版 日本書道史（共著）、2009 年、23－43・45－63 頁
- ③ 森岡隆、教育出版、文部科学省検定済教科書・高等学校芸術科『新編書道Ⅱ』（共著）、2008 年、48－59 頁・口絵 4 頁分ほか
- ④ 森岡隆、教育出版、『新編書道Ⅱ 教授資料 学習指導の研究』（共著）、2008 年、112・115－116・118－122・124－125・127 頁
- ⑤ 森岡隆、教育出版、文部科学省検定済教科書・高等学校芸術科『新編書道Ⅰ』（共著）、2007 年、66－81・91・93・97 頁ほか
- ⑥ 森岡隆、教育出版、『新編書道Ⅰ 教授資料 学習指導の研究』（共著）、2007 年、136・139－143・145－146・148－149・151－155 頁

〔その他〕

（展覧会）

- ① 森岡隆、平安王朝のかなの書の美が 千

年の時を経て いま甦る「高野切本古今
和歌集」復元全巻完成記念展、筑波大学
総合交流会館・多目的ホール、2011 年 2
月 8 日～13 日

＊同展ホームページ

<http://www.geijutsu.tsukuba.ac.jp/sca/info/104>

<http://www.art.tsukuba.ac.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森岡 隆 (MORIOKA TAKASHI)
筑波大学・芸術系・教授
研究者番号：70239630

(1) 研究協力者（復元制作者）

巻一 手島和典・吉嶺絵利
巻二 中谷 正
巻三 高橋佑太
巻四 倉持宗起
巻六 高橋佑太
巻七 橋本貴朗
巻九 林 信賢
巻十 手島和典・中村裕美子
巻十一 中溝朋美
巻十二 高橋智紀
巻十三 若松志保
巻十四 楠山美智子
巻十五 成田真理子
巻十六 油田望花
巻十七 若松志保
巻十八 楠山美智子
巻十九 川口仁美・安生成美